

八代城志全

館新書會育私本日大			
二			三
一	一	二	一
冊	號	架	函

特31  
375

026341-000-3

特31-375

八代城志

磯田 正敬/編

M17

ADC-4127

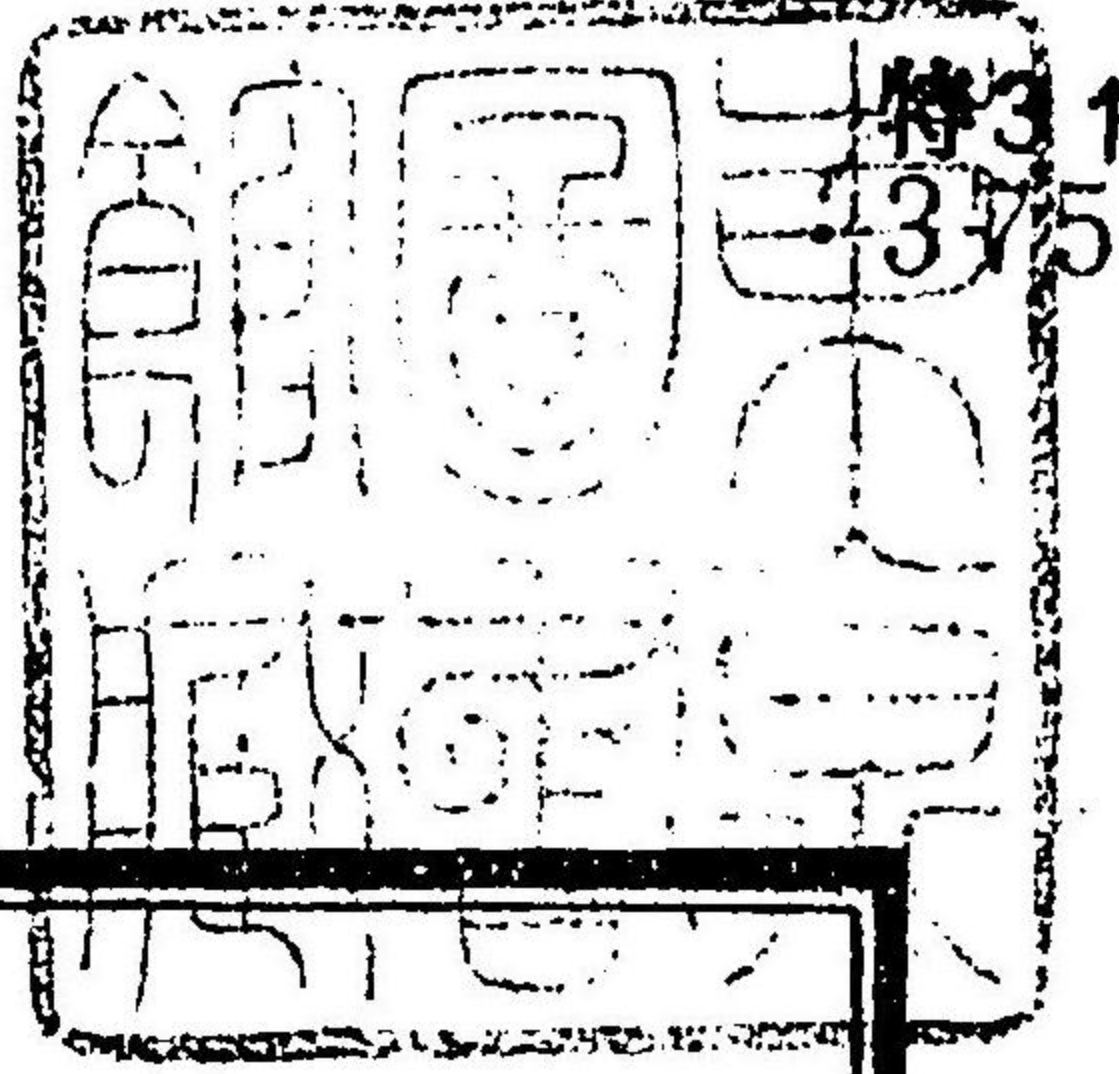


明治十七年三月版權免許

磯田正敬編纂

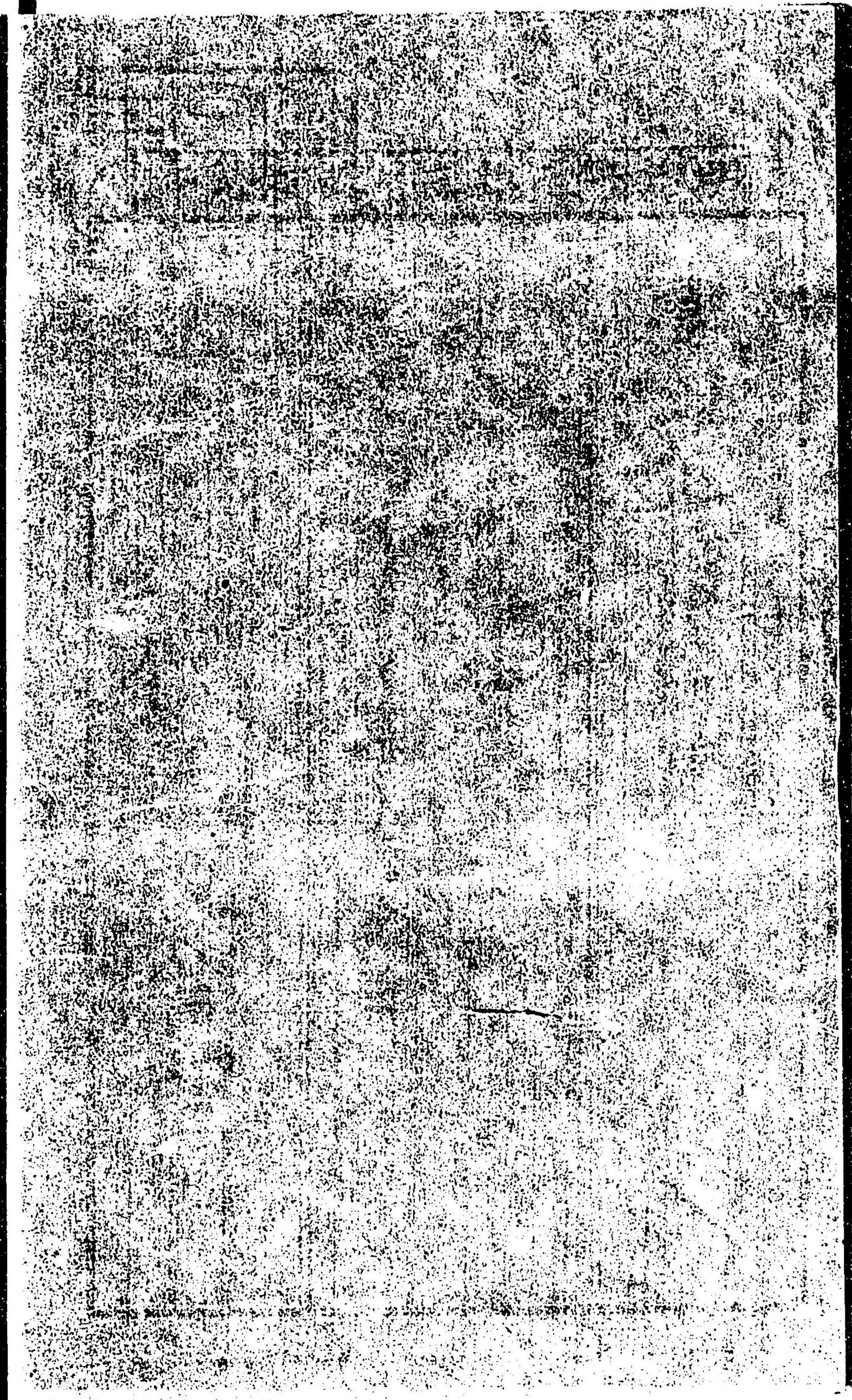
八代城志

八代活版舎印刷



物後

熊本縣令富岡公題辭



星福

高思敬明



八代城志序

英雄之用武也察地勢之利害審攻守之難易而後鑿斯池築斯城欲以摧勁敵挫巨寇也其或不幸取敗滅則其迹也有麥黍秀焉麋鹿遊焉者或雖一時羅環攻之厄然有存其城壘之半者或建築以後幸未識兵戈之何物層樓重壁巍峨而尚有依然乎今日者嗟乎城郭亦有幸不幸哉抑方今屬聖代之運海內一家非復群雄割據之時且也火器之製日開大礮巨煩之勃發震雷一擊觸者輒齧粉矣是以金湯之固又終為懸沉也雖然當時英雄之所經營至顧其地勢攻守如何則又所以武學家之不可廢而其存與沒宜詳錄而備其觀省也頃者八代之士

磯田正敬承鎮臺之命以選八代城志蓋八代在我后肥  
之南端而球摩之浩流滔々入海此所即當日薩通衢之  
咽喉更爲一要地而其爲城也始乎古麓終乎松江其間  
五百年許之沿革紛紜茫乎孰知烏之雌雄而正敬一下  
考證之手而英雄之興亡城郭之轉移僅披此志則燦然  
如視掌而不特地勢之利害攻守之難易又足以補史氏  
之闕文也正敬之業可謂勤矣志旣成徵序於予々雖一  
寒生亦名和氏之支流餘裔則於此書與有因焉是故敢  
不辭其不文慨然懷舊之餘乃援筆作此序

明治十七年二月

名和 範 識

### 八代城志序

今の世をよくれりてふと、むのしよもえとをいぬるの中に、學問の道をし  
ゆことよ其をいよし「し」ことなりて、皇國の學をなきく仇國の事のみを  
ぞとせ、おのの郷里の事をとらて、かへつて仇國のこととまほふなどの、  
さかぞまかる風習を捨て、まよひの筋につとめゆるしみける時をむむ、こ  
ろ磯田ぬし、今回 熊本鎮臺に命令を蒙りて、撰出あるこれの城志を、  
則彼ならえしをほ忍ぶれ、けりさるかたよ、つとめたりやもれをさるべきま  
ことれ筋として、上を名和氏の履歷より、下を松井氏の事跡をいたるまで、  
建武以降の沿革を一目にわさされて、いじあをいじり一冊をきあわす  
る、さげ我八代にして、昔よりさばりつやめたりとみゆる、書もあ  
くたま〜地誌めくものあれども、是をも杜撰多くして、た〜しきえ

河内口をしき業なりかし。ゆえに此撰よ、數多に正史古又書をもと據て  
してゆき出られた。彼命を應じてよけ奉れる故、とてゆみなるむはるであ  
らうしく、其草稿故、活版をもつしむるは、所謂かいつておのる郷里  
のこそ故あらぬ人ともよ、分與によなき幸故、うししや、ゆえよゆえをしく  
おもふなりしも、一こと故と、ゆるまゝに、やう存すは序文とある、ゆき  
えいつ

明治十六年神無月

紅於園 一如識

### 八代城志緒言

一 明治十六年十月八日始命 正敬 以八代城誌圖編纂  
之事蓋係熊本領臺之要請也 正敬 草莽之一書生而  
淺陋無識固自知其不當顧世豈無其人乎然 正敬 嘗  
與其事故不敢辭焉始 正敬 以明治六年一月二十日  
奉八代縣管內地誌編緝之命未幾是月八代縣廢矣  
更奉白川縣管內宇土八代葦北三郡地誌編緝之命  
爾來拮据殆一周年其十二月宇土郡地誌草案幾成  
七年一月會廳議停地誌編緝於是解職乃一歲之事  
業盡屬水洩遺憾不可堪也八年二月再命八代葦北  
二郡地誌編纂之事限以六十日間 正敬 慮事業遂不

可成故請辭而後地誌之撰無與知焉然獨患我鄉乏地誌人苦其涉獵今茲遇有此命是則勉所以成編也

一此編豫期三十日成稿時仲冬短日况寒鄉乏書畫則就朋友故舊之居訪古老之家借書聽話或巡視地形省察今古變態之趣或取準繩計畫其廣袤高低夜則編書製圖十一月八日初稿漸成雖然事業匆匆况以正敬之淺陋無識欲泝五百有餘年之古晰人代之盛衰詳地勢之沿革自揣其遺漏不貲而不免疎畧輕信之譏也必矣乃就郡長財津君謀焉財津君優待假以數日乃得粗補其脫畧矣會八代警察署長持永君聞

我八代城志編纂之事自要省覽 正敬 乃濟所著之草案而請檢閱十二月九日再稿成矣

一此編非爲地作也爲城作也是以事多闕畧文從簡約若欲觀地誌審形勢有如肥後國志新編肥後事蹟考者就而考可也

一此編據今古之文書而有截取原文有取舍稟括以成文者是以文體往々不同亦以足觀察時世之變故不勉改

一此編稱呼文體如關尊崇者然係朝廷之事故不可諱也

一此編附屬沿革圖二葉其意一以可觀城郭構造之地

理一以可察江河變態之形勢但恨紙幅有限不能詳  
悉其細小又不保無其少差也

明治十六年十二月

磯田正敬識

八代城志引用書目

肥後國志	內河系譜	洞然長狀	名和系圖	名和傳譜	名和傳譜	五條文書	名和紀事	阿蘇文書	太平記	名和文書	八代城志引用書目
相良系圖	日本外史	肥州古城主考	藩翰譜	鰐社傳記	鎮西要畧	名和系譜	菊池武朝申狀	關城書	菊池軍記	菊池軍記	



清正勳蹟考

國史畧

佐々傳記

加藤家傳

八代淨信寺記

長瀬宗信覺書

和漢年契

細川系圖

松井家譜

松井系圖

松井康之神道碑

熊本藩年代便覽

内外一覽

太政官布告達

熊本縣布達

熊本縣治一覽概表

代南戰地日誌

松井社記

八代城歴世系統

○古麓城

〔自建武二年至天正十六年〕經年二百五十四年

内河右泰

彦三郎、名和義高臣、建武二年、

一色道猷

〔足利高氏臣、延元元年二月ヨリ〕

一色道長

同年五月マテ

名和顯長

伯耆守

懷良親王

征西大將軍、延元四年三月

名和顯興

伯耆守

村上泰興

〔伯耆守、名和泰興、〕

村上顯真

〔阿波守〕

村上教長

彈正少弼

村上顯忠

彈正少弼

賊據有

寛正元年ヨリ、同六年マテ

村上顯忠

寛正六年ヨリ、文明十六年マテ

相良爲績

左衛門尉、文明十六年ヨリ

村上顯忠

明應八年ヨリ、永正元年マテ、六年間

次郎

相良長每

近江守、永正元年ヨリ

相良長祇

同十二年マテ、十二年ヨリ  
太正五年マテ、十二年ヨリ

相良義滋

宮内大輔、大永五年ヨリ、  
天文十五年マテ、十二年間

相良晴廣

左兵衛佐、天文十五年ヨリ、  
弘治元年マテ、九年間

相良義陽

修理大夫、弘治元年ヨリ、  
天正九年マテ、七年間

島津氏據有

天正九年ヨリ、同十五年マテ、  
七年間

豊臣秀吉

大岡、天正十五年、四月

佐々成政

家臣交替、天正十五年六月ヨリ、  
同十六年五月マテ、一年間

福島正則

左衛門大夫、  
天正十六年五月

○麥島城

自天正十六年、  
至元和五年、經年三十二年

小西行重

美作、小西行長臣、天正十六年閏  
五月ヨリ、慶長四年迄、十二年間

小西長貞

若狹、小西行長臣、慶長五年十月迄

加藤清正

家臣交替、慶長五年ヨリ、元和元年マテ、十六年間

加藤正方

右馬允、加藤忠廣臣、元和元年ヨリ、同五年マテ、五年間

○松江城

自元和六年、經年二百五十一年、至明治三年

加藤正方

元和六年ヨリ、寛永九年マテ、十三年間

細川忠興

三齋宗立、自寛永九年、正保二年迄十四年間、中務大輔

長岡興長

佐渡、細川家臣、正保三年ヨリ、寛文元年マテ、十六年間

長岡寄之

佐渡、寛文元年ヨリ、同六年マテ、六年間

長岡直之

筑後、寛文六年ヨリ、元禄五年マテ、二十七年間

長岡壽之

帶刀、元禄五年ヨリ、正徳四年マテ、二十三年間

長岡豐之

帶刀、正徳四年ヨリ、明和三年マテ、五十三年間

長岡營之

主水、明和三年ヨリ、文化元年マテ、三十九年間

長岡徴之

帶刀、文化元年ヨリ、同十三年マテ、十三年間

長岡督之

山城、文化十三年ヨリ、天保十一年マテ、二十五年間

長岡章之

佐渡、天保十一年ヨリ、文久三年マテ、二十四年間

松井盈之

新次郎、長岡帶刀、復讐松井、改名新次郎、文久三年ヨリ、明治三年マテ、八年間

自建武二年、古籠城建築、至明治三年

通計五百三十六年、於是廢八代城

八代城元和六年建築之圖

東西八百拾六間

則拾三町三拾六間

南北四百四拾八間

則七町貳拾八間

幅員拾萬千六百零貳平方間

則六拾貳町八反六畝貳拾貳步

此圖曲尺六毛二五及壹間ト

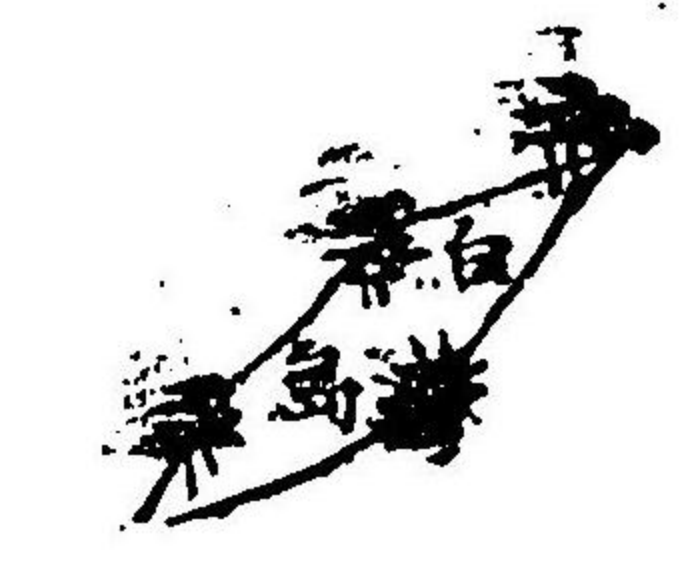
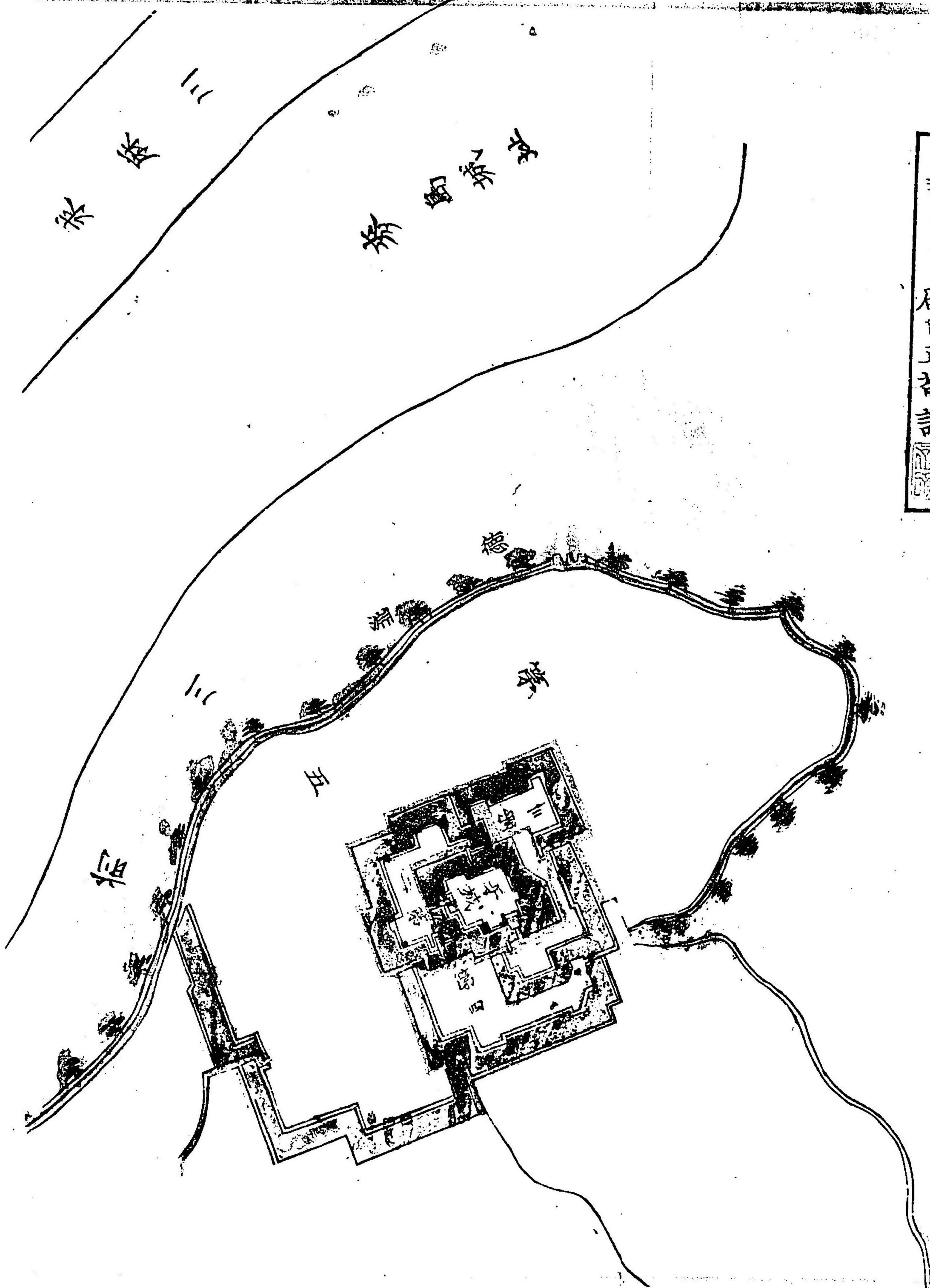
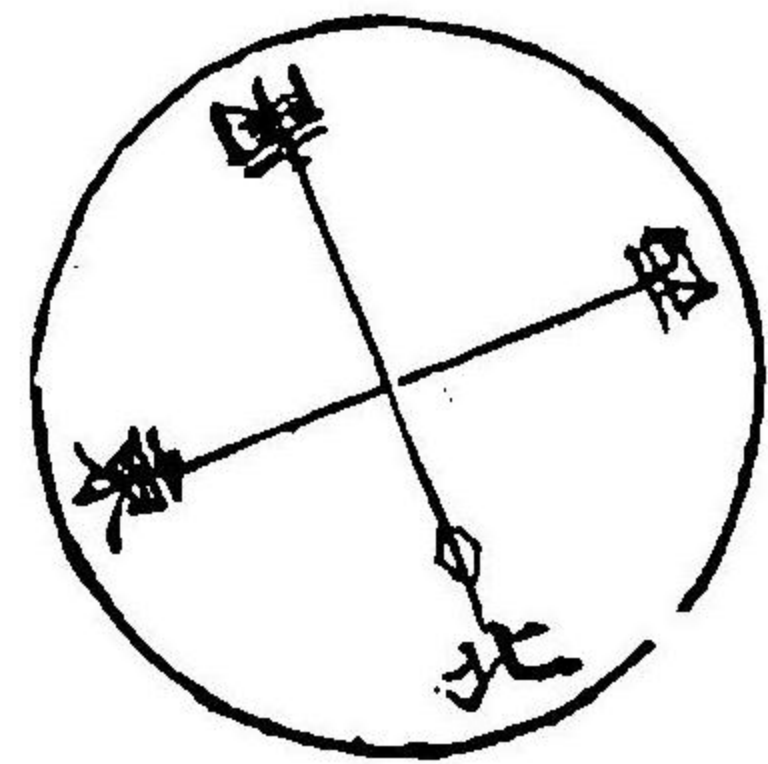
ス然尺細微ノ縮圖ナレハ或ハ少

差ナキヲ保シ難シ請フ者官之

ヲ諒セヨ 磯田正敬識



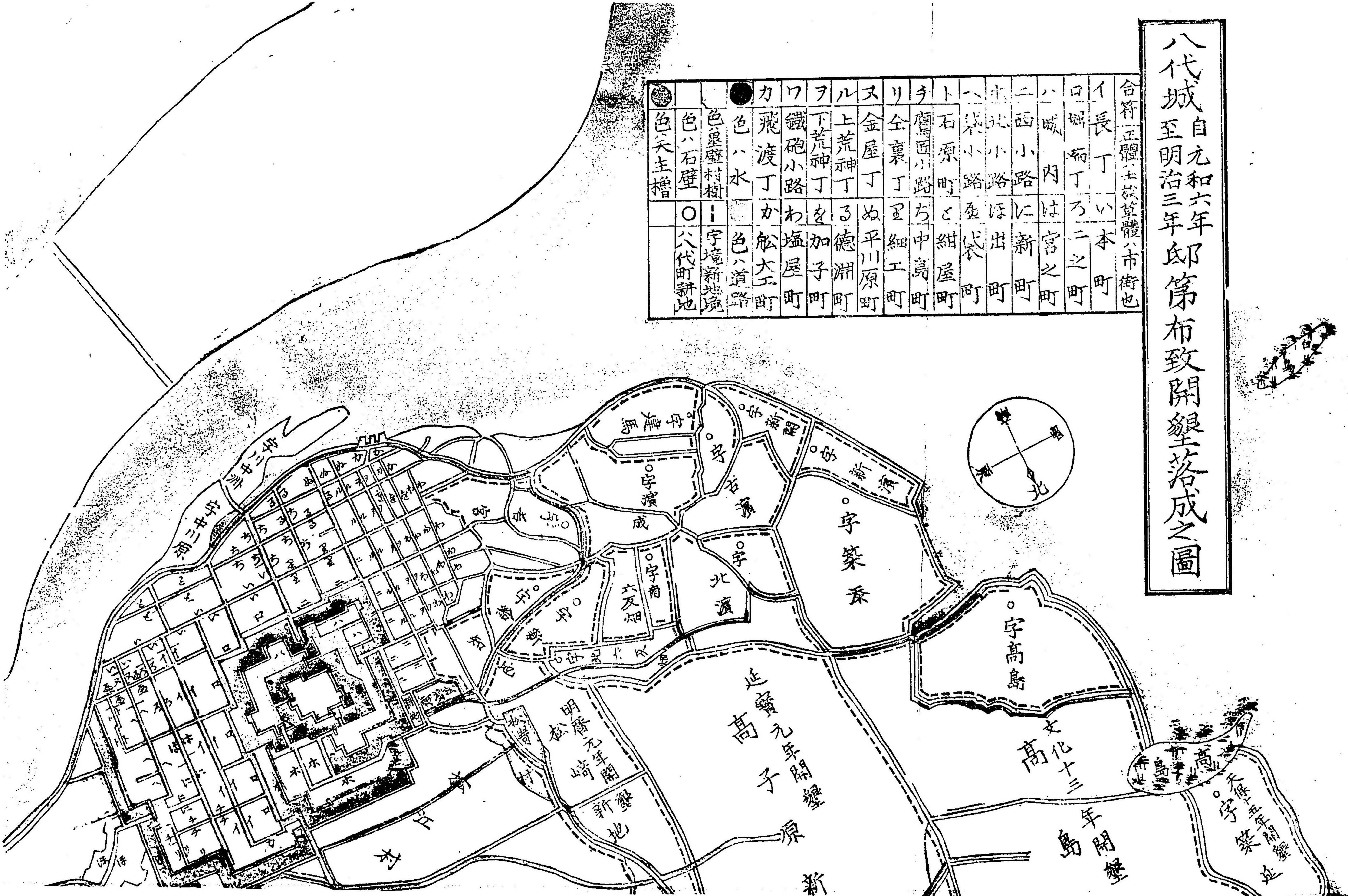
合符	濠川海	墨壁深田	石壁	天主櫓
----	-----	------	----	-----



八代城自元和六年邸第布致開墾落成之圖

合符正體（土）草體（八）市街也

イ長丁	イ本町	口堀	二宮之町	二西小路	二新町	一北小路	一袋小路	一石原町	一鷹匠小路	一全裏丁	一細工町	又金屋丁	又平川原町	ル上荒神丁	ル徳淵町	ヲ下荒神丁	ヲ加子町	ヲ鐵砲小路	ヲ塩屋町	カ飛渡丁	カ船大工町	色八水	色八道路	色八石壁	色八土主槽



高島  
文化十三年開墾  
高島  
大正五年開墾  
高島  
大正五年開墾

高子原  
延寶元年開墾

明曆元年開墾  
新地

字高島

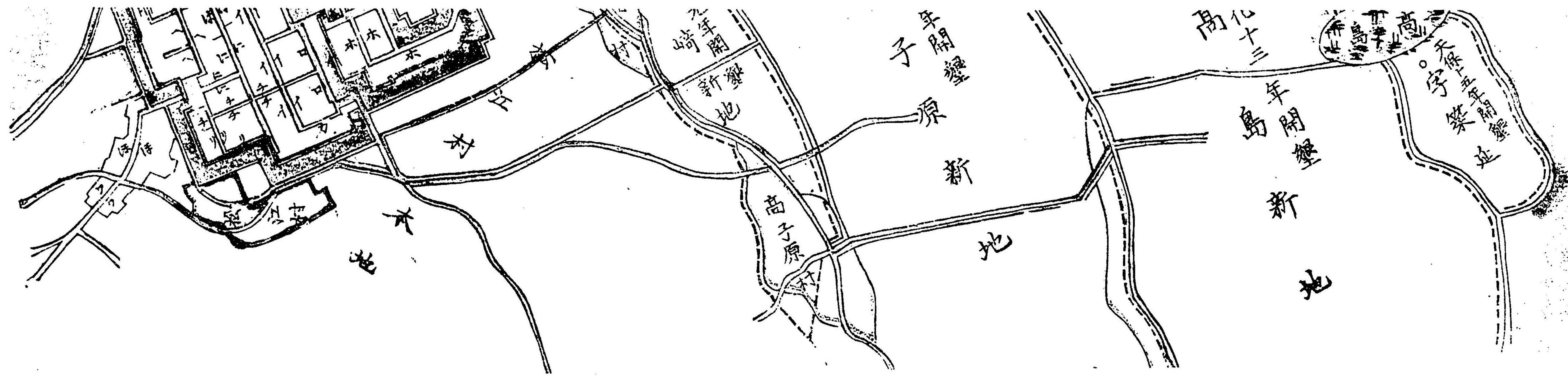
字築系

字北濱

字南  
六反畑

字成

字海舟



八代城誌

奉命 熊本縣士族肥後國八代郡八代町

磯田正敬編纂

八代城

八代城ハ元和六年庚申、某月、從四位下、侍從、兼肥後守  
 加藤忠廣、八代郡、德淵村、松江村ノ地ヲトシ、南ハ、求麻  
 川、德淵ノ北岸ニ沿ヒ、西ハ、不知火海、北ハ、泥淖ノ汚地  
 ニ據リ、其長臣、加藤〔紀姓、片岡氏、加藤氏ヲ冒スハ、忠廣ノ長臣タルヲ以テノ故ナリ、〕右馬允、  
 正方ヲシテ、同郡、麥島城ヲ移シ、築シムル所也、乃チ、德  
 淵城ト稱シ、又松江城ト稱ス、壘、檣、築クニ、白石ヲ以テ  
 ス、故ニ又、白石城ト稱ス、〔肥州古城主考、藩翰譜、肥後國志、〕



八代城ハ其由テ來ル久シ、其濫觴ヲ原ルニ、松江ニ在スシテ、麥島ニ在リ、麥島ニ在スシテ、古麓ニ在リ、抑モ八代城ハ、今ヲ距ル五百五十年前、古麓ニ創リ、三百年前一轉シテ、麥島城トナリ、二百六十年前、再轉シテ、松江城トナル、即チ今ノ八代城址ナリ、而シテ古來、八代城ノ名、史籍ニ散見シ、其關係モ、亦渺トセス、故ニ、其經歷ヲ、列序セザル可ラザル也、古麓城ハ、八代郡、古麓村ニ、舊址存セリ、是即チ往昔、八代郡太田郷、鷺尾丸山ニ地ヲトシ、東南北ハ、山嶽重疊ノ險ニ據リ、西ハ不知火海ニ面シ、求麻川ノ巨流ニ沿ヒ、建築スル所也、當城ハ、後醍醐天皇、建武二年

乙亥某月日、正四位上、伯耆大夫判官、名和義高、八代庄、地頭職タルヲ以テノ故ニ、後遂ニ同氏族ノ、據有スル所トナル、〔名和又書〕始メ、其臣、内河彦三郎ヲ遣テ、八代城ニ、居守セシム、〔菊池軍記、太平記、並ニ彦五郎トス、内河系譜ヲ閱スルニ、彦五郎ナシ、但、兵衛三郎眞信ノ二男、彦四郎眞親アリ、眞親ハ、延元元年、正月、書寫山ニ於テ自害ス、恐クハ、眞信ノ弟、彦三郎右泰ナラン、今之ニ從フ〕延元元年丙子、止月足利高氏〔尊氏ヲ故ノ如ク高氏ト書ク〕關城書、阿蘇文書、〔等ニ據ル〕京師ヲ侵ス、二十七日、高氏軍遂ニ敗レ、鎮西ニ、走ル、二月、兵ヲ勒シ來テ、肥後ノ諸城ヲ攻ム、菊池城既ニ陷リ、八代城ヲ圍ム、攻撃甚急ナリ、而シテ、衆寡敵セス、城兵出降ル、高氏乃チ一色道猷、一色

道長ヲシテ、八代城ヲ守シム、四月高氏九國ノ兵ヲ率ヒ、大舉シテ、京師ニ向フ、五月菊池武重、菊池城ヲ復シ、八代城ヲ攻ム、賊將道猷、道長、固守スト雖ヒ、遂ニ敗レ、道猷、道長、皆ヲ敗死シ、八代城ヲ復ス〔菊池軍記〕四年己卯、三月、征西大將軍、懷良親王、菊池武光ノ管内、肥後國、八代城ニ入ル、〔菊池武朝申狀、阿蘇文書〕此時、義高ノ嫡男、正六位上、檢非違使、伯耆權守、顯長、從子顯興、長年ノ弟、信濃法眼、源盛等、一族以下、手勢三百餘人ヲ率ヒ、親王ニ屬シテ、八代城ニアリ、〔名和紀事〕後村上天皇、正平十九年甲辰、顯長遁世シテ、顯興其家ヲ承ケ、從四位下、檢非違使、彈正大弼、伯耆守ニ叙任

ス、〔名和系譜〕顯興、八代郡、古麓城ニ在リテ、一族上神出羽守重光ヲ、葦北郡、佐敷城ニ、嘉悅越前守ヲ、同郡、津奈木城ニ、耶黨進、惡兵衛真春ヲ、同郡、田浦城ニ、本郷式部少輔家久ヲ、同郡、水俣城ニ、内河彥三郎ヲ、八代郡、小河城等ニ置テ、各所ノ所領ヲ守ラシメ、征西府ヲ擁ス〔阿蘇文書、菊池軍記〕弘和三年癸亥、三月二十七日、征西將軍、懷良親王、八代高田ノ御所ニ薨ス〔菊池武朝申狀、五條文書〕元中十四丁丑年〔先是、元中九年、南朝、後龜山天皇、北朝ト講ナリ、然リト雖モ、征西府尙ホ、北朝ノ年號ヲ用ヒス、西隅ニ孤立ス〕後將軍官、長成親王、八代高田ノ御所ニ在リ、武朝、顯興、是ヲ奉シテ、屢興復ヲ謀ル、八月二十二日、大内義弘、大友親世、カ爲メニ、八

代城竟ニ陥リ、將士散亡ス 〔鎮西〕 顯興ノ男、村上泰  
 興、亦從五位下、彈正少弼、伯耆守ニ任シ、麓城ニ居ル  
〔名和系譜〕 顯興、大内義弘、大友親世カ爲メニ、八代城ヲ去ルハ、鎮西要  
〔畧ニ見ル所ニシテ、系譜ニ、其男泰興麓城ニアリトス、今其故ヲ知り難  
シ、正敬按スルニ、南朝、既ニ位ヲ北帝ニ讓リテ、獨リ征西府、九州八代ノ  
一隅ニ孤立シ、確乎トシテ動カス、猶ホ、南朝ノ年号ヲ用ヒテ、再舉テ謀ル  
ヲ、茲ニ六年、是時ニ當リテ、矢盡キカラ窮リ、後將軍宮モ、自ラ跡ヲ晦シ  
矢部ノ大柵ニ潛匿ス、故ニ泰興モ、力ヲ及ハサルヲ計リ、假リニ賊ニ降リ  
而シテ累代ノ居城ニ入ルヲ 泰興ノ男、正五位下、阿波守、村  
 上顯興、顯興ノ男、從四位下、彈正少弼、村上教長、教長  
 ノ男、義興、早世シテ教長ノ姪、正五位下、彈正少弼、村  
 上顯忠、世々相承ク、顯忠カ麓城ニ在ルヤ、寛正初年、  
 隣敵ノ爲メニ、襲撃セラル、遂ニ保守スル能ハス、潛  
 ニ城ヲ出去ル、六年、其長臣、内河式部少輔喜定、密ニ

義故ヲ糾合シ、却テ、賊ヲ麓城ニ攻ル、甚タ急ナリ、賊  
 遂ニ守ル能ハスシテ去ル、喜定乃チ顯忠ヲ迎ヘテ、  
 麓城ニ歸ラシム、〔名和傳譜〕 是ニ於テ、八代庄、及ヒ葦  
 北郡、益城郡、豊福等ノ地ヲ復シ、兵威亦振フ、文明中、  
 益城郡、守富庄、宇土郡等ヲ併セ領ス、〔名和文書〕 文明  
 三辛卯年、肥後國、求摩郡、人吉城主、相良左衛門尉爲  
 續、來テ古麓城ヲ攻ム、爾來連年、爲續カ攻撃息ム時  
 ナシ、十五年癸卯、十月十六日夜、古麓城大手橋上ニ  
 戰フ、十一月十五日、犬馬場ニ戰フ、〔名和〕 十六年甲  
 辰、三月七日、城守利アラヌ、顯忠降ル、爲續、八代、葦北、  
 ナ併セ、領シ代テ古麓城ニ、主タリ、顯忠、遁テ木原城

ニ居ル、〔名和系圖、藩翰譜、洞然長狀、參取、洞然者、相良之族、沙彌洞、修理、賴兵、剃髮號洞然、天文五年、著相良家代々之專、然長狀〕明應八年己未、三月、爲續八代ヲ避ケテ、求麻ニ退ク、顯忠及ヒ重年、乃ケ麓城ヲ收ム、九年庚申、六月、爲續卒ス、又龜元年辛酉、五月、爲續ノ男、近江守相良長每、兵ヲ率ヒ來テ、麓城ヲ攻ム、兵ヲ三面ニ分テ合圍ス、城中堅ク守テ降ラス、長每、我邑六郷〔所謂八代テ六郷トス、高田郷、太田郷、三ヶ郷、小犬郷、道前郷、道後郷、是ナリ、後、高田、野津、種山ノ、三郷トス〕ヲ奪ヒ、兵ヲ留メテ去ル、二年壬戌、八月、長每又來テ、麓城ヲ圍ム、尙ホ降ラス、十月、長圍ヲ築キ、兵ヲ留メテ去ル、三年癸亥、八月、長每又來リ攻ム、自ヲ同郡萩原ニ陣ス、十一月、城下ニ薄ル、會菊池肥後守、能運、阿蘇惟良各

兵ヲ遣リ、長每ヲ援ケ、麓城ヲ攻シム、圍城殆ント六ケ月、城中堅ク守テ降ラス、永正元年甲子春、能運、正觀寺僧、東松軒某ヲ城中ニ使シ、和ヲ議ス、顯忠父子、命ニ應シ、二月七日、遂ニ降テ城ヲ致ス、是日、長每代テ麓城ニ入ル、永正十二乙亥年、長每自ヲ老テ、全郡今泉村〔八代郡、下松、求麻村ノ内〕ニ隱栖シ、休也ト號ス、〔洞然長狀〕其男、相良太郎、長祇ヲシテ、繼テ麓城ニ居ラシム、大永五年丁酉、正月十一日、長祇自殺ス、其嗣、宮内太輔、從五位下、相良義滋、繼テ麓城ニ主タリ、天文十五年丙午、八月十二日卒ス、其嗣、左兵衛佐、從五位下、相良晴廣、繼テ城主タリ、弘治元年乙卯、八月十二日卒ス、其

男、修理大夫、從四位下、相良義陽、繼テ麓城ニ主タリ  
〔相良系譜〕 武威隣國ニ振ヒ、位從四位下ニ昇ル、當時鎮  
西ノ大名ニ、其例ナシ、〔藩翰譜〕 永祿六壬戌年、島津義  
久、其弟、島津家久、及ヒ其臣、新納忠元ナシテ、兵八千  
ニ將トシ、肥後ニ入り、相良義陽ヲ擊タシム、管内ノ  
支城、皆陷ル、進テ古麓城ヲ攻ム、其城險ニ據リ、堅ク  
守テ拔ケス、家久等、乃テ砦ヲ築キ、兵ヲ留メテ去ル  
天正六戊寅年、義久、其弟、島津義弘ナシテ、兵五千ニ  
將トシ、肥後ニ入り、來テ諸城ヲ攻ム、七年己卯、三月  
更ニ、新納忠元等ナシテ、兵六萬三千餘ニ將トシテ、  
來テ肥後ニ入ル、義陽孤城守リ難ク、衆寡敵セス、遂

ニ欸ヲ送ル、〔菊池軍記、肥州古城主考、參取〕 九年辛巳、十二月朔、義陽、  
肥後國、益城郡、御船城主、甲斐民部少輔、宗運ヲ擊ツ、  
二日進テ、響原ニ軍ス、會々宗運カ、逆擊スル所トナ  
リ、義陽敗死ス、三日、嗣子、四郎太郎忠房、八代城ヲ去  
リ、舊邑、求麻郡ニ入り、人吉城ニ據ル、〔藩翰譜、肥後國志、參取〕  
是ニ於テ、城地人民、皆ナ島津氏ノ有トナル、島津氏、  
家臣ヲ遣リテ、交替留守セシム、既ニシテ、島津氏、九  
州ヲ併有スルニ至ル、〔菊池軍記、藩翰譜、日本外史、肥後國志、參取〕 十五年丁  
亥、三月朔、秀吉、自テ諸軍ニ將トシ、京師ヲ發ス、〔菊池軍記、日本外史〕 西シ、島津氏ヲ伐ツ、四月、進テ高良山ニ軍  
ス、肥後諸城皆ヲ解走ル、新納忠元、伊集院忠棟、走テ

八代ヲ保ツ島津征久ト、兵ヲ合セ堅ク守ル、秀吉、兵艦ヲ以テ、之ヲ攻ム、忠元等夜遁ル、秀吉、其城ニ入り、乃チ衢路ニ榜シテ曰ク、名門故家、敵ノ脅迫ニ從フ者、及ヒ豪俠大盜、徒ヲ衆メ黨ヲ結フ者、一切皆ヲ宥メテ、其自新ヲ聽ス、令初テ下リ、軍門市ノ如シ、五月進テ千代川ニ至リ、本營ヲ、太平寺ニ置ク、義久降ル六月、秀吉凱施ス、太宰府ニ至リ、盡グ九州ノ質子ヲ收メ、大ニ功罪ヲ論ス、島津氏ヲシテ、故土ニ因リ、薩摩、大隅日向ヲ領セシメ、其侵地ヲ削リ、肥後ヲ、佐々陸奥守、成政ニ賜フ、〔菊池軍記、清正勳蹟考、日本外史、國史畧、參取〕關土、相良忠房ニ、本領五百町其他、五十一人ニ、各本領ヲ賜リ、

成政ニ附庸セシム、〔菊池軍記、佐々傳記、名和紀事、參取〕成政、隈本城ニ在リテ、其臣、某々ヲ遣リ、八代城ニ、交替留守セシム、〔肥後國志〕十六年戊子、五月十四日、成政ニ死ヲ賜ヒ、國除ル、〔佐々傳記、肥州古城主考〕秀吉既ニ、成政カ封ヲ褫ヒ、福島正則ヲ遣リ、八代城ヲ守ラシム、其他、城村、菊池、内牧、御船、隈本、宇土ノ、六城ニハ、加藤清正等ノ、六將ヲ遣リテ、之ヲ鎮セシム、〔肥州古城主考附錄、長瀬宗信覺書〕閏五月、肥後半國〔飽田、詫摩、山鹿、山本、菊池、合志、玉名、上益城、阿蘇、葦北、十郡〕二十五万石ノ地ヲ、主計頭、加藤清正ニ賜フ、其半國〔宇土、下益城、八代、天草、四郡〕二十万石ノ地ヲ、梅津守、小西行長ニ賜フ、〔肥州古城主考、加藤家傳、清正勳蹟考〕是ニ於テ、行長宇土城ニ居ル、而シテ行長、其

臣、小西美作ヲシテ、八代郡、麥島ニ城シム、是ヲ麥島城トス、肥州古城主考、油正勳蹟考、麥島城ハ、天正十六年戊子、閏五月、攝津守、小西行長、肥後半國ノ主トナリ、八代郡、麥島村ノ地ヲトシ、東南ハ、求麻川ノ巨流ニ沿ヒ、北ハ、徳淵ノ深潭ニ臨ミ、西ハ、海濱斥鹵ノ地ニ據リ、其臣、小西美作行重、本名、木戸、作右衛門、ナシテ、古麓城ヲ移シ、築シム、乃チ行重ヲシテ、城ヲ守ラシム、又、錄元年壬辰、正月、秀吉、朝鮮ヲ伐ツ、加藤清正、小西行長、先鋒タリ、秀吉、秀家ヲシテ代リ往シ、而シテ自ラ出テ、肥前ニ陣シ、以テ、策應ヲ爲ス、乃チ大ニ那古耶ニ城キ、建テ行營トス、二月二十八日、秀吉、京師ヲ發ス、四月二

十八日、遂ニ那古耶ニ至ル、先是、諸軍那古耶ニ會スル者五十万人、三月朔、始メテ、纜ヲ解ク、水陸九軍、海ヲ蔽テ渡ル、加藤家傳、清正勳蹟考、日本外史、參取、六月、薩州湯尾城主、梅北宮内左衛門、盛定弟、民部左工門、盛勝等、其主、島津義久ノ弟、那答院、左衛門尉、歳久カ命ヲ奉シ、清正行長ノ不在ヲ時トシ、逆ヲ謀ル、乃チ、兵七百三十人ニ將トシ、來テ肥後ニ入ル、十五日、佐敷城ヲ襲フ、會マ、城代、加藤與左衛門重次、本名、澁谷、後改名、大和、軍ニ朝鮮ニ從ヒ、坂井善左衛門貞行ヲ留メテ、城ヲ守ラシム、貞行力拒ク可ラサルヲ計リ、佯リ降テ、城ヲ致ス、盛定、即チ代テ佐敷城ニ入ル、十六日、盛定、東郷甚右衛

門春貞、忍果助秋元、矢島内藏助常時、人見源吾、松本對馬、奥村五助則行、谷口五郎左衛門等ヲシテ、兵二百餘人ニ將トシ、舟船ヲ佐敷港ニ蟻シ、而シテ八代城ヲ襲撃セシム、十七日、賊麥島城ヲ圍ム、先是麥島ノ城代、小西美作、佐敷城ノ警聞ヲ得テ、已ニ守城ノ備ヲナス、同郡小川城主、松浦筑後守吉次、應援ヲナス、賊我城壘ニ臨ミ、濠ヲ隔テ、銃ヲ發ス、是時城中、齊ク弓銃ヲ發シテ彈射ス、玉矢雨注ス、賊兵大ニ敗ル、將ニ來路ニ就キ、錨ヲ拔去ントス、會議スル所ノ舟船、斥鹵ノ地ニアリ、潮己ニ退キ、膠シテ行ルヘカラス、賊等狼狽、船ヲ捨テ散走ス、我兵北ルヲ逐ヒ、銃ヲ

發シテ賊ヲ射ル、楳子虛發ナレ、賊將矢島常時等、斥鹵ヲ難走シ、求麻川ノ淺湍ヲ涉リ、逕ヲ植柳ニ取リ、葦北ニ赴ク途ナ琵琶潭葦北郡二見村ヲ經其地、懸崖絶壁、深潭ニ臨ミ、人得テ並行ス可ラス、松浦吉次、手兵ヲ率ヒ、賊兵ヲ此ニ要ス、賊兵未タ覺ラズ吉次乃チ賊ト戰ヒ、忍十忍果助、奥村五助等ヲ討ツ、其他三十餘人ノ首級ヲ得テ、之ヲ麥島城ニ送ル、是日、我軍首級ヲ獲ル、凡百十餘級、東郷春貞、矢島常時、僅ニ身ヲ以テ免ル、行キ赤松嶺ニ至リ、取兵ノ來ルヲ待ツ、斷ニシテ五十人ヲ得タリ、會々人アリ報シ曰、昨、梅北盛定、弟盛勝、敵將坂井貞行、安田恒際、彌藏、井上吉弘



彌一郎、井上次重、與七郎等カ、手又スル所ト爲リ、業  
 既ニ首領ヲ授ケ、佐敷城陷リ、士卒盡ク散亡スト、言  
 未ダ畢ラス、兵アリ、山巡ヲ攀シ來ル、到レハ則テ、土  
 豪田浦某カ、土兵ヲ將ヒ來レルナリ、賊兵進退惟谷  
 ル、先是、坂井貞行、檄ヲ田浦相模ニ飛シ、報シ曰、今マ  
 薩賊八代ニ向フ、則テ城ヲ圍ム、日有ラハ、急ニ兵ヲ  
 出シテ之ヲ援エ、但、我已ニ事ヲ、麥城ニ報ス、故ニ賊  
 必ス敗ル、ヲ知ル、果シテ然ラハ、之ヲ險阨ニ要シ、  
 賊ヲシテ子遺アラシムル勿レト、是ニ於テ、相模士  
 兵ヲ將ヒ賊<sup>ヲ</sup>進テ、弓銃交射ス、賊死ヲ決シテ奮闘  
 スト雖モ、敗殘ノ羸兵、何ヲ以テ堪ユヘケンヤ、又遂

ニ大敗ス、東郷春貞、矢島常時ハ、相模カ爲メニ斬獲  
 セラル、敗兵四十餘人、亦盡ク土兵ノ爲ニ殺サル、此  
 寇ヤ、坂井貞行等カ智謀ヲ以テ、直ニ魁首ヲ獲、佐  
 敷城ヲ復ス、小西行重、八代城ヲ固守シ、賊ヲ攘フ、不  
 日ニシテ、捷聞那古耶ニ達ス、先是、秀吉自ラ海ニ航  
 セントス、淺野長政、其不可ヲ陳ス、秀吉大ニ怒リ、將  
 サニ長政ヲ殺ントス、會々肥後寇アリ、乃テ其男、幸  
 長ヲシテ赴討シム、未タ果サス、秀吉捷聞ヲ得テ、大  
 ニ坂井等カ智勇ヲ感シ、書及ヒ物ヲ賜テ之ヲ賞ス、  
 〔加藤家傳、清正勳考、肥後國志、日本外史、參取〕慶長五庚子年、宇土城主、小西  
 橋津守行長、大坂ニアリ、其臣、小西隼人長元及ヒ、南

條伯耆元宅等ヲシテ、宇土城ニ留守セシメ、小西若  
狹長貞ヲシテ八代城ヲ守シム、九月、行長、石田三成  
ニ屬シ、徳川家康ト、美濃國、關ヶ原ニ戰フ、二十日、隈  
本城主、加藤清正、來テ宇土城ヲ圍ム、薩摩國主、島津  
義弘モ亦、石田三成等ニ黨ス、乃々其臣、本郷能登ヲ  
シテ、兵三百人ヲ率ヒ、八代ニ來テ、小西長貞ヲ援ケ  
シム、二十八日、長貞、宇土ノ急ヲ聞キ、薩摩ノ兵ヲ遣  
テ之ヲ援シム、清正己ニ之ヲ謀知シ、森本儀太夫一  
久、相田六右衛門、奥村數馬ヲ遣リ、兵ヲ率ヒテ之ヲ  
途ニ迎ヘシム、然レモ薩兵未タ覺ラス、行ク三里、八  
代郡、宮原ニ至ル、忽チ敵ニ土橋ノ傍ニ遇フ、敵即チ

齊シク銃ヲ發ス、彈丸霰飛シ、本郷能登戰死ス、薩兵  
大ニ潰エ、走テ八代ニ退ク、後是ヲ亂橋ノ戰ト云フ、  
宇土城圍ヲ受ル數旬、城兵堅ク守テ降ラス、十月某  
日、關ヶ原ノ取聞至ル、清正之ヲ城兵ニ示シ、説降ス、  
二十一日、小西長元、南條元宅、城中ニ自殺シ、城兵門  
ヲ出テ降ル、八代城將、小西長貞、尋テ自殺シ、八代城  
亦降ル、清正乃チ城ヲ收メ、吉村吉左衛門、堤權左衛  
門ヲシテ、八代城ヲ守シム、家康乃チ、行長カ舊封ヲ  
併セテ、清正ニ賜フ、六年、清正隈本ニ城キ、熊本城ト  
改稱ス、又自ラ八代城ヲ修築ス、十年、清正、從五位上、  
肥後守ニ叙任ス、十六年辛亥、六月二十四日、清正卒

ス、其男、虎藤嗣ク、從四位下、侍從兼肥後守ニ叙任シ、  
 名ヲ忠廣ト改ム、元和元乙卯年、忠廣、其長臣、加藤清  
 左衛門 正 方 采邑二万五千石、父清左衛門可重、肥後國、内牧城ヲ守ル、清止ニ仕テ屢殊功アリ、慶長九年甲辰、八月二十八日死、正方尋テ内牧城ヲ守ル、 ナシテ、八代城ヲ守ラシム、名是ニ於テ、八代ニ遷ル  
 ナ右馬允ト改ム、士卒七隊ヲ分テ、正 方ニ屬セシム  
 其兵三百六十人ト云フ、五年巳未、三月十七日、地大  
 ニ震ヒ、城郭頽毀ス、六年秋、同郡松江、徳淵ノ地ニ移  
 シ築シム、是ヲ松江城トス 加藤家傳、清止勳蹟考、肥後國志、淨信寺記  
 地形ハ、平垣ニシテ、南ハ求麻川ノ巨流ニ面シ、東ハ古  
 麓山 古城址 脈ヲ距ル一里、北ハ廣漠ノ水田ニ連レリ、西  
 ハ不知火海ニ瀕シ、斥鹵ノ地アリト雖モ、船舶輻輳便

ナ關カス、遠クハ薩隅、日、肥、筑諸州ニ接シ、近クハ球磨  
 天草ノ咽喉ヲ占メ、天下有事ノ日ニ當テハ、矢フ可カ  
 ラサルノ地トス、故ニ豫メ其得失ヲ計較シ、不虞ヲ警  
 戒セサル可カラサル也、抑モ正 方ノ城ヲ此地ニ築ク  
 能ク其地位ヲ得ルト謂フヘシ、牙城ハ四圍樓櫓ヲ屏  
 列シ、五層ノ天主閣アリ、二層三層ノ櫓アリ、東北ニ門  
 アリ、東門 本門ト名ツク 前ニ欄干橋ヲ架シ、北門 煙門ト名ツク 前ニ  
 廊下橋ヲ架ス、石壁直立二十六尺、天主第一閣、石壁直立三  
 十六尺、東西六十六尺、  
 南北七十五尺、第二閣、石壁直立三十二尺、  
 東西二十九尺、南北四十三尺、  
 東西八十五間、南北七  
 十七間、幅員六千五百四十五平方間、周池 幅凡十  
 五間 四百  
 十九間、第二郭ヲ二ノ丸 又東  
 ノ丸 ト云ヒ、石壁直立十八

尺、第三郭ヲ大手郭〔但北部ヲ分界シテ、其一部ヲ北ノ丸ト云フ〕ト云ヒ、石壁直立十八尺、第四郭ヲ北小路郭ト云、石壁直立十八尺、第五郭ヲ八代市街トス、總郭東西八百十六間、南北四百四十八間、幅員十八万八千六百零二平方間、〔則六拾貳畝貳拾〕士族ノ邸宅、商賈皆ナ此内ニ居ル、戸數二千百貳拾九、人員九千四百六十九人、〔男四千五百八十七人、女四千八百八十二人〕石壁ヲ築ク其半ニ過ク、周池ハ常ニ水ヲ湛ヘリ、八年春城郭概成ス、正方ノ此城ヲ守ル、歳ヲ經ル十三年、而シテ外郭ノ如キハ、未タ竣功ニ至ラズ、寛永九年壬申六月朔、加藤忠廣、國除ノ出羽國莊内ニ請モラル右馬允正方モ、八代城ヲ退去ス、〔藩翰譜肥後國志〕十月、從四位下、少

將兼越中守、細川忠利、肥後ニ移シ封セララル〔采邑五十四万石〕

十二月九日、忠利自ラ熊本城ニ入ル、廿五日、其父、三齋細川忠興、〔從三位、前宰相兼越中守致仕号三齋宗立〕八代城ニ入ル、後々自ラ

北ノ丸ニ移リ、五男中務大輔、細川立孝ヲシテ、才城ニ居ラシム、十八年癸丑、三月、忠利卒ス、其男、從四位下、侍

從兼肥後守、細川光尙、封ヲ襲ク、正保二年乙酉、閏五月立孝卒ス、十二月二日、忠興卒ス、三年丙戌、八月、細川光

尙、幕命ヲ奉シ、其長臣長岡佐渡興長ヲシテ、八代城ヲ守ラシメ、騎士五十人ヲ遣リ、興長ニ屬セシム、是ヲ八

代城附ト稱ス〔興長ハ、源姓松井氏、其十六世ノ祖、重行、源賴朝ニ仕ヘテ、山城國綴喜郡ニ封セラレ、松井ニ居ル子孫襲キ封ス、遂ニ族トス、父、從五位下、佐渡守、松井康之ハ、初メ足利義輝ニ仕

フ、永祿八年、五月、康之伊勢ニ遊フ、會マ三好義繼等、義輝ヲ弑ス、康之カ一

族之ニ死シ、封邑皆ナ没ス、未之還テ據ル所ナシ細川藤孝、足利義昭ヲ奉シテ出テ九州ニ居ル、康之往キ之ニ調シ、以テ恢復ヲ謀ル十一月、信長義昭ヲ奉シテ、賊ヲ討ツ、康之其徒屬ヲ帥テ、藤孝ノ軍ニ屬ス、初メ賊、藤孝カ勝龍寺城ヲ攻ム、城陷ル、藤孝以テ之ヲ復ス、康之亦從フ、遂ニ細川氏ニ依ル、細川氏待ツニ賓禮ヲ以テス十二年、藤孝、康之カ在武衆ニ出ルヲ以テ、之ヲ留ント欲シ、食味ヲ與フ、天正元年、信長、藤孝ヲ城州西岡ニ益シ封ス八年、藤孝、丹後ニ移シ封セラレ、康之ノ累年功アルヲ嘉シ、采邑一萬三千石ヲ與ヘ、元老ト爲シ日置城ヲ守ラシム始テ二軍ヲ爲ル、仲子、細川興元、左軍ニ將トシ康之右軍ニ將タリ、十年康之ヲシテ、丹後國、熊野郡、久美、松若ニ城シム、而シテ康之久美城ニ主タリ、後、松倉城ニ居ル、是歲、藤孝老ス、其男細川忠興嗣ク、秀吉、忠興ノ封ヲ益シ、且命シテ、封内七千石ノ地ヲ割テ、康之ノ采邑ヲ益サシム、原ヲ併セテ、二万石、十三年秀吉、康之カ功多キヲ以テ、山城國、相樂郡、神童寺村、百六十石一斗七升ノ采邑ヲ康之ニ、同國受宕郡、八瀬村、十三石一斗二升ノ采邑ヲ康之母ニ賜フ、十四年、康之從五位下、佐渡守ニ叙任ス、秀吉ノ豊臣姓、及ヒ菊洞ノ章ヲ賜フ、十六年、四月、後陽成天皇秀吉ノ聚樂第ニ幸ス、康之、諸大夫ノ事ヲ掌ル、文祿元年、忠興ニ從テ、朝鮮ヲ伐ツ、二年、朝鮮ヨリ歸ル、秀吉、康之ノ累年大切アルヲ以テ石州ノ半ヲ割キ封シテ列侯ト爲サントス康之固辭ス、秀吉益マス、康之ノ忠誠ヲ嘉シ山

城國、相樂受宕郡、康之母子ノ采邑百七十三石二斗九升ノ地ヲ併セテ康之ニ賜ヒ、曰卿著理ヲ嗜ム、菲薄ノ邑入耶カ薪炭ノ給トス、其レ辭スル勿レト、伏見城成ル、康之ニ第宅一區ヲ賜フ、慶長三年戊戌、八月十八日、秀吉薨ス、五年庚子、二月、家康、豊後國速見郡、杵築ヲ以テ忠興ニ益シ封ス、忠興乃チ、康之及ヒ、有吉立行ヲシテ杵築ヲ鎮セシム、十一月家康、忠興ヲ豊前ニ益シ封ス、杵築故ノ如シ、六年辛丑七月七日、康之ニ采邑五千石ヲ益ス、原ヲ併セテ貳万五千石、遷テ左軍ニ將タリ杵築城ヲ守ル、十七年壬子、正月二十三日、康之卒ス、嗣子長岡佐渡與長封ヲ襲ク、采邑二万五千石及ヒ山城國兩郡采邑故ノ如シ、尋テ杵築城ヲ守ル、元和七年、忠興致仕ス、三男、細川忠利封ヲ襲ク、寛永九年壬申、十月將軍德川家光、忠利ヲ肥後國ニ移シ封ス是ニ於テ、與長カ采邑五千石ヲ益ス、原ヲ併セテ三万石、十一月、興長、忠利ニ從テ肥後ニ入り、熊本ニ居ル、松井康之神道碑、松井家譜、四年幕府ニ詣リ、將軍德川家光ニ謁見シ、佩刀、及ヒ馬、時服五領ヲ納レ、入城ノ恩ヲ謝ス、家光、舊ニ依リ時服五領外袍一領ヲ賜フ、先是、元和六年、幕府大坂城ヲ修ス、興長役ニ與ル元年、再ヒ大坂城ヲ修ス、興長亦與ル、將軍家光、召見テ之ヲ慰レ、時服六領外袍一領ヲ賜フ、前將軍秀忠、亦召見テ、時服五領、外袍一領ヲ賜フ、十三年

江戸成ヲ脩ス、興長、亦與ル、將軍家光、召見テ之ヲ慰シ、蒙章ノ外袍ヲ賜シ  
 ナ、之ヲ賜フ、且令シテ、虞之ノ舊ニ依リ、城州兩郡ノ采邑ヲ賜フ、興長乃テ  
 佩刀、及ヒ馬、侍服五領ヲ納レテ、襲封ノ恩ヲ謝ス、是ニ於テ、家光亦、侍服五  
 領外袍一領ヲ賜フ、二十年、幕府ニ詣リ、將軍家光ニ謁見シ、佩刀、及ヒ馬、時  
 服五領ヲ納ル、是ニ於テ家光、侍服五領、外袍一領ヲ賜フ、凡ソ、將軍禪代、及  
 ヒ襲封、必ス往テ恩ヲ謝ス、松井氏ノ、幕府ニ入謁スル、獻酬、概テ此例ニ依  
 ル、慶安二年己丑、十二月二十八日、光尙卒ス、其男、從  
 四位下、少將兼越中守、細川綱利、封ヲ襲ク、明曆元乙未  
 年、先是興長、細川光尙ニ請ヒ、城西松江村、沿海斥鹵ノ  
 地ヲ拓キ、各地無産ノ人民ヲ移シ耕サシメントス、未  
 タ果サス、是歲十一月功ヲ起シ、三日ニシテ成ル、良民  
 子ノ如ク來リ移ル、是ヲ松崎村トス、寬文元年辛丑、六  
 月二十八日興長沒ス、嗣、長岡佐渡寄之、尋テ八代城ヲ

守ル、采邑三万石、城州兩郡采邑、亦故ノ如シ、八月二十  
 七日、八代城ニ入ル、九月十二日、幕府ニ詣リ、將軍徳川  
 家綱ニ謁見シ、佩刀、馬、時服三領ヲ納レ、襲封、及ヒ入城  
 ノ恩ヲ謝ス、家綱、時服三領、外袍一領ヲ賜フ、六年丙午  
 正月六日、寄之沒ス、其男、長岡筑後直之、尋テ八代城ニ  
 居リ、城州ノ采邑、及ヒ家祿ヲ襲ク、（先是、寬文三年、六月、直  
 馬一匹ヲ納レ、將軍徳川家綱ニ謁見ス、是ナ  
 部屋住謁見ト云フ、松井氏世々、此例ニ據ル）四月十八日、幕府ニ詣  
 リ、佩刀一口、馬一匹ヲ納レ、將軍徳川家綱ニ謁見シ、襲  
 封、及ヒ入城ノ恩ヲ謝ス、十二年壬子、二月十九日、雷八  
 代城ニ震ス、一、二ノ天主閣、樓櫓家屋ニ延燒ス、兵器モ  
 亦多ク燒亡ス、細川綱利、乃テ甲冑、刀、鎗、弓、銃、大小礮、及

ノハ、何、城、記、也、  
ヒ、屬、具、ヲ、伊、セ、テ、之、ヲ、贈、リ、之、カ、准、備、ヲ、爲、ス、三、失、彈、丸、  
之、ニ、稱、フ、七、月、綱、利、幕、府、ニ、陳、シ、テ、之、ヲ、脩、ス、〔天主第一  
閣ハ復脩  
スセ〕  
延、寶、元、年、癸、丑、二、月、直、之、細、川、綱、利、ニ、請、ヒ、沿、海、斥、鹵、  
ノ、地、ヲ、開、墾、シ、兵、備、ニ、允、ツ、十、一、月、土、木、功、竣、ル、後、是、ヲ、  
高、子、原、村、ト、ス、四、年、八、代、城、脩、築、功、竣、ル、六、年、戊、午、五、月、  
將、軍、德、川、家、綱、薨、ス、弟、綱、吉、職、ヲ、紹、ク、天、和、元、年、辛、酉、三、  
月、幕、府、ニ、詣、リ、佩、刀、一、口、馬、一、匹、ヲ、納、レ、將、軍、德、川、綱、吉、  
ニ、謁、見、ス、元、祿、五、年、壬、申、十、月、二、十、九、日、直、之、沒、ス、其、男、  
長、岡、帶、刀、壽、之、壽、ヲ、八、代、城、ヲ、守、リ、城、州、ノ、采、邑、及、ヒ、家、  
祿、ヲ、襲、ク、大、年、癸、酉、三、月、幕、府、ニ、詣、リ、佩、刀、一、口、馬、一、匹、  
ヲ、納、レ、將、軍、德、川、綱、吉、ニ、謁、見、ス、寬、永、七、年、庚、寅、細、川、家、

宣、將、軍、職、ヲ、紹、ク、六、月、朔、幕、府、ニ、詣、リ、佩、刀、一、口、馬、一、匹、  
ヲ、納、レ、將、軍、德、川、家、宜、ニ、謁、見、ス、是、歲、九、月、山、城、國、愛、宕、  
郡、八、瀬、村、拾、三、石、壹、斗、貳、舛、ノ、地、ニ、換、ヘ、和、泉、國、泉、郡、尾、  
井、村、ノ、地、ヲ、賜、フ、正、德、二、年、壬、辰、七、月、十、二、日、細、川、綱、利、  
致、仕、ス、其、嗣、從、四、位、下、侍、從、兼、越、中、守、細、川、宜、紀、襲、テ、肥、  
後、ニ、主、タ、リ、四、年、甲、午、正、月、壽、之、致、仕、自、ラ、老、ス、其、男、長、  
岡、帶、刀、豐、之、壽、ヲ、八、代、城、ニ、居、リ、城、州、泉、州、ノ、采、邑、及、ヒ、  
家、祿、ヲ、襲、ク、享、保、六、年、〔先是、將、軍、家、繼、既、ニ、薨、シ、  
德、川、吉、宗、將、軍、職、ヲ、紹、ク、〕辛、丑、三、月、  
二、十、八、日、幕、府、ニ、詣、リ、佩、刀、一、口、馬、一、匹、時、服、五、領、ヲ、納、  
レ、將、軍、德、川、吉、宗、ニ、謁、見、ス、四、月、二、日、將、軍、吉、宗、時、服、五、  
領、外、袍、一、領、ヲ、賜、フ、十、七、年、壬、子、六、月、二、十、六、日、細、川、宣、

紀卒ス、其男、從四位下、侍從兼越中守、細川宗孝、襲テ肥  
後ニ封セラル、延享二年、徳川家重、將軍職ヲ結ク、四年  
丁卯、八月十六日、細川宗孝卒ス、其嗣、從四位下、少將兼  
越中守、細川重賢、襲テ肥後ニ封セラル、寛延二年己巳  
四月二十八日、幕府ニ詣リ、佩刀各一口、馬各一匹ヲ納  
レ、將軍徳川家重、世子家治、前將軍徳川吉宗ニ謁見ス  
寶曆十一年、六月、將軍家重薨ス、世子家治、職ヲ襲ク、十  
三年癸未、十月十五日、幕府ニ詣リ、佩刀各一口、馬各一  
匹ヲ納レ、將軍徳川家治、世子家齊ニ謁見ス、明和三年  
丙戌、七月朔、豐之致仕自ラ老ス、其男長岡主水、營之、紹  
テ八代城ニ居リ、城州泉州ノ采地、及ヒ家祿ヲ襲ク、四

年丁亥、十二月十五日、幕府ニ詣リ、佩刀各一口、馬各一  
匹、絹五卷ヲ納レ、將軍徳川家治、世子徳川家齊ニ謁見  
シ、襲封及ヒ入城ノ恩ヲ謝ス、五年戊子、二月六日、將軍  
家治、絹五卷ヲ賜フ、先是、寶曆八年戊寅、十一月、營之、幕府ニ詣  
リ將軍徳川家重、世子家治ニ謁見ス、獻酬舊  
ニ依ル、天明五年乙巳、十月二十五日、細川重賢卒ス、其男  
從四位下、侍從兼、越中守、細川治年、襲テ肥後ニ封セラ  
ル、七年丁未、九月十六日、細川治年卒ス、其嗣、從四位下  
少將兼、越中守、細川齊茲、襲テ肥後ニ封セラル、是歲、徳  
川家齊、將軍職ヲ結ク、十二月十五日、營之、幕府ニ詣リ  
佩刀一口、馬一匹ヲ納レ、將軍徳川家齊ニ謁見ス、寛政  
九丁巳年、十月二日、八代城災ス、牙城ノ館舎、二階櫓ニ



延燒ス十年、三月、細川齊茲、幕府ニ陳レ、八代城ヲ再脩  
 ス、享和三年癸亥、三月、土木功竣ル、文化元年甲子、七月  
 二十三日、營之致仕自ラ老ス、其男、長岡帶刀徵之、紹テ  
 八代城ニ居リ、城州泉州ノ采地、及ヒ家祿ヲ襲ク、二年  
 乙丑、四月二十八日、幕府ニ詣リ、佩刀各一口、馬各一匹  
 ナ納レ、將軍德川家齊、及ヒ世子家慶ニ謁見シ、襲封、及  
 ヒ入城ノ恩ヲ謝ス、〔先是、寛政三年丁亥、二月二十八日、徵之、幕  
 府ニ詣リ、將軍德川家齊ニ謁見ス、獻酬舊ニ  
 依ル〕五月三日、家齊、絹五卷ヲ賜フ、七年庚午、十一月十  
 日、細川齊茲致仕ス、其男、從四位下、少將兼越中守、細川  
 齊樹、襲テ肥後ニ封セラレ、十三年丙子、六月二十五日  
 徵之致仕自ラ老ス、其嗣、長岡山城督之、紹テ八代城ニ

居リ、城州泉州ノ采地、及ヒ家祿ヲ襲ク、文政二年己卯  
 六月朔、幕府ニ詣リ、佩刀各一口、馬各一匹ヲ納レ、將軍  
 德川家齊、及ヒ世子家慶ニ謁見シ、襲封、及ヒ入城ノ恩  
 ナ謝ス、六日、將軍家齊、絹五卷ヲ賜フ、〔先是、文化十二年乙亥  
 十二月朔、督之幕府ニ  
 詣リ、將軍德川家齊、及ヒ世子  
 家慶ニ謁見ス、獻酬舊ニ依ル〕九年丙戌、二月二日、細川齊樹卒  
 ス、其嗣、從四位上、中將兼越中守、細川齊護、襲テ肥後ニ  
 封セラレ、天保十一年庚子、十一月八日、督之没ス、其嗣、  
 長岡佐渡章之、紹テ八代城ニ居リ、城州泉州ノ采邑、及  
 ヒ家祿ヲ襲ク、十二年七月朔、幕府ニ詣リ、佩刀各一口、馬各一  
 匹ヲ納レ、將軍德川家慶、及ヒ世子家定ニ謁見シ、襲封  
 及ヒ入城ノ恩ヲ謝ス、十八日、將軍家慶、絹五卷ヲ賜フ

安政元年、徳川家定、將軍職ヲ紹ク、三年、六月朔、幕府ニ詣リ、佩刀一口、馬一匹、絹五卷ヲ納レ、將軍徳川家定ニ謁見ス、十一月、將軍家定、章之ニ、絹五卷ヲ賜フ、萬延元年、庚申、四月十七日、細川齊護卒ス、其男、從四位下、少將兼越中守、細川韶邦、襲テ肥後ニ封セラレ、文久三年、癸亥、二月二十八日、長岡章之致仕自ラ老ス、其男、長岡帶刀、盈之、紹テ八代城ニ居リ、城州泉州ノ采邑、及ヒ家祿ヲ襲ク、先是、章之カ、八代城ニ在ルヤ、歐洲各國ノ兵制大ニ變化シ、火器ノ製作日ニ益、精微ヲ窮メ、其戰鬥ノ用ニ供スルハ、固ヨリ劍鎗弓矢ノ比ニ非サルヲ知ル況ンヤ、文化、文政間、魯英ノ軍艦屢々來テ我カ邊疆ヲ

侵ス、爾來連年、各國我ヲ窺テ措カス、然レモ我未タ備エス、章之大ニ之ヲ患ヒ、銃礮ノ理ヲ窮ル、茲ニ年アリ天保、弘化間、遂ニ自ラ一家銃礮ノ技術ヲ創メ、名ケテ天弘流ト云フ、天保ニ始リ、弘化ニ成ルノ義乃チ、家臣等ヲシテ、火技ニ精練ナラシメ、大礮小銃若干ヲ與フ、而シテ、自カラ備ユル所ノ大礮、凡ソ百六十四門、小銃凡ソ千九百貳十七、彈丸硝藥、之ニ稱フ、嘉永四辛亥年、更ニ倉庫幅四棟行三十間ヲ、北ノ丸ニ建築シテ、之ヲ藏ス、後チ明治四年、皆チ之ヲ八代縣ニ納ル、明治二年己巳、八月七日、盈之任熊本藩大參事、九月二十七日、長岡氏ヲ改メ、松井ニ復ス、熊本藩年代便覽、細川系圖、松井家譜、松井系圖、參取先是、慶應三年丁卯、十月、將

軍徳川慶喜政權ヲ朝廷ニ奉還シ、將軍職ヲ辞ス、朝廷  
 之ヲ聽ルス、十二月幕府ヲ廢ス、明治二年己巳正月各  
 藩封土ヲ奉還ス、〔内外一覽〕三年庚午四月、盈之家祿ヲ官  
 ニ致シ、八代城ヲ退クヲ請フ、未タ可セス、是月、朝廷盈  
 之カ、山城和泉兩國ノ采邑、百七十三石貳斗九升ニ換  
 エ、廩米貳拾貳石ヲ賜フ、五月、職ヲ辞ス未タ可セス、六  
 月、本官ヲ免シ、金三拾兩ヲ賜フ、是月、盈之、八代牙城ヲ  
 避テ、第二郭ニ居ル、七月二日、請ニ依テ、八代城守衛ノ  
 任ヲ解ク、〔正保三年、長岡興長、八代城ニ入ル、世ヲ傳ル、十世、年ヲ經ル、凡二百二十五年〕是ニ於テ、盈  
 之、八代城ヲ退キ、熊本ニ移ル、八月、官、盈之カ舊臣ノ數  
 ナ檢ス、士族五百三十九戸、人員二千六百四十九人、卒

族三百四十六人、〔松井家譜〕九月、熊本藩知事、細川護久、官  
 ニ請ヒ、熊本城、及ヒ八代城ヲ廢ス、〔内外一覽〕閏十月、  
 盈之ノ家祿、三万石ニ換エテ、廩米千七百十七俵ヲ賜フ  
〔松井家譜〕四年辛未、七月、廢藩置縣、十一月、肥後國、下益城  
 宇土、八代、葦北、球磨、天草ノ六郡ヲ割テ、八代縣トシ、縣  
 廳ヲ八代郡、八代ニ置キ、八代舊城ヲ以テ縣聽トス、〔太  
 官布告達〕六年、一月、八代縣ヲ廢シテ、白川縣ニ併ス、十年丁  
 丑、二月、西郷隆盛、兵ヲ帥ヒ、來テ肥後ニ入ル、熊本縣士  
 族、賊ニ應スル者甚タ衆シ、但八代ノ士族、賊ニ應セス  
 獨リ八代ノミナラス、地方〔八代郡、葦北郡、當時、第十  
 三大區、第十三區トス〕ノ士  
 族、三千七百八十八人、賊ニ黨スル者僅ニ十人、〔熊本縣治  
 一覽、概表〕

二十二日、賊熊本城ヲ圍ム、兵ヲ分テ、官軍ヲ田原坂ニ迎フ、對壘殆ント四十日、賊防禦甚タカム、官軍之カ爲メニ苦戰、屢々勝敗アリ、而シテ我カ南方、更ニ賊ニ抗セス、其實ハ衆寡敵セサルヲ以テ、密ニ時機ヲ俟ツナリ、然トモ、賊未タ覺ラス、故ニ賊亦我ニ備エス、三月十九日、會マ官軍、葦北郡、日奈久港ニ蟻ス、八代士族、踊躍シテ之ヲ迎エ、導テ八代ニ入ル、是ニ於テ、賊ノ援路忽テ斷ユ、既ニシテ、官軍連戰皆捷ツ、進テ、宇土ニ軍ス、賊八代ノ援路ヲ失ヒ、甚タ困ス、乃テ賊將逸見十郎太、別府新助、宮崎真卿等、更ニ薩兵〔必死隊ト稱ス〕數千人ヲ帥ヒ、來テ八代ヲ襲ヒ、擊テ之ヲ復セント欲ス、四月六日、賊東

南來リ薄ル、東ハ日置川〔八代城ヲ距ル僅ニ七八町〕ノ堤ニ據リ、南ハ求麻川ノ堤ニ據リ進ム、先是、松井氏ノ舊臣〔即チ在八代士族〕等、自ラ奮テ隊ヲ爲シ、正義隊ト稱ス、是日、官ニ請テ南面ノ賊ニ當ル、求麻川ヲ夾テ戰フ、戰將ニ酣ナラントスル比ニ、東面ノ官軍幾ント敗ル、我兵乃テ退テ八代ニ入ル、賊忽テ求麻川ヲ涉リ、我ニ尾シ來ル、我隊外郭〔即チ求麻川ノ堤防ナリ、求麻川ノ分流、前川、堤下ニ漢ク〕ノ壘壁ニ據リ、一線ノ水〔即チ前川〕ヲ隔テ防キ戰フ、賊ト相距ル僅ニ數十步、戰ヒ甚タ危シ、是時ニ當テ、我隊在ル者僅ニ四十餘人、憤激身ヲ壘上ニ露シテ狙撃ス、楯ヲ虚發ナシ、賊以テ我ニ備アリトシ、遁レテ高田ニ走ル、我隊追撃、殺傷筭無シ、狼

狷求麻川ヲ涉リ溺死スル者亦數十人、會マ官軍ノ援  
 兵松橋ヨリ來リ、東面ノ賊ニ當リ、其背後ヲ衝ク、東面  
 ノ賊亦走ル、十三日賊再ヒ來リ、官地山及ヒ古麓山  
 址古城ニ據リ櫻馬場ニ壘シ、八代ヲ拔ナ計ル、官軍攻撃  
 四日、賊亦能ク守ル、十七日官軍大ニ進テ、賊ヲ古麓山  
 下ニ破ル、凡ソ南方ノ賊我カ八代ヲ窺ヒ、不意ヲ襲フ  
 前後二回、而レテ官軍皆ヲ勝モノハ、固ヨリ朝威ニ依  
 ルト雖モ、抑亦正義隊與リテ力アリ、此役ヤ、徒手空拳  
 何ヲ以テ、彼ノ強賊ニ當ルヲ得ヘケンヤ、是レ舊主章  
 之音ニ家臣ヲシテ火技ニ精練ナラシムルノミナラ  
 ス、曩ニ與ユル所ノ大礮小銃若于アルヲ以テ、此捷ヲ

奏スルヲ得タリ、乃チ十二年、二月二十五日、松井緞之  
 之男松井盈之西南ノ役功有ルヲ以テ、特旨正六位ニ叙シ  
 其父盈之ニ緞子一卷、紅白縮緬各一匹、祖父章之ニ紅  
 白縮緬各一匹ヲ賜フ、八月四日、舊臣事ニ與ル者即チ正義  
 隊ニ、金ヲ賜各差アリ、代南戰地日誌十三年、八月、征西  
 大將軍懷良親王、及ヒ、後征西大將軍長成親王ヲ併セ  
 祭リ、八代宮ト號シ、官幣中社トシ、八代城址牙城ニ地  
 ナトシテ、宮社ヲ建築セリ、太政官布告達十四年、十月、松  
 井氏ノ舊臣、竹田之定、千葉退去、并上秀啓、以下五百餘  
 名、及ヒ松井氏ニ因アル者、皆ヲ康之、與長ノ功名英武  
 ナ思慕シ、且其累代ノ恩澤ヲ感懷シ、是ヲ官ニ告ケテ

一祠ヲ北ノ丸ニ創建シ名ケテ松井神社トス、〔松井社記〕  
 始メ將軍懷良ノ肥後ニ來ル、固ヨリ菊池氏ノ奏請ニ  
 係ルト雖モ、其八代ニ來ルハ實ニ名和氏八代城アル  
 ニ由ル、而シテ南風競ハス、榊新田、菊池、名和、土居、得能  
 兒島等ノ諸族モ亦タ南朝ト終始ヲナシ皆亡ラ、後或  
 ハ名實ヲ併セテ、又將サニ地ニ墜ントス、而シテ天運  
 循環往テ還ラサル無ク、時明治ノ隆運ニ遭遇シ、當時  
 南朝ノ皇族及ビ忠臣義士皆テ其勤勞忠死ノ地ニ就  
 テ、宮社ヲ建築シ、祭祀ヲ曠クスルニ至ル、是ニ於テ懷  
 良、良成ノ兩將軍、五百年ノ後、神靈再ビ代城ニ入り、以  
 テ萬世ニ傳フ、吳起曰、道者所以反本復始ト、是其相似

也

八代城誌終

117  
1  
104

明治十七年一月十五日出版版權願  
全年二月二十六日版權免許

編輯者

熊本縣士族  
磯田族

定價拾錢

印刷

全 柴縣士族  
肥後國八代郡八代町四拾貳番地

同國同郡同町七百五拾六番地

主

全 牧縣平民

同國同郡同町千參百九拾四番地

任

全 森縣平民

同國同郡同町七百七番地

彫刻者

全 德縣士族

同國八代郡八代町七百五拾六番地寄留

法義

